

道博協ニユース

第4号

発行 昭和51年3月31日
 発行所 北海道博物館協会(事務局)
 函館市青柳町17-1
 市立函館博物館内
 (0138)-23-5480

アメリカの博物館研修雑感

米村 哲英

日本博物館協会は、昭和四十九年度から海外博物館の特別調査事業を計画し、第一回の昨年度は自然系博物館関係者を北米三ヶ国に派遣し、その調査について大きな成果を得たのである。

今年度は第二回として歴史・美術系博物館関係者をもつて、アメリカを中心に特別調査団が編成され、私もその一員として参加する機会を得ることができた。

調査期間は昭和五十年十一月二十三日、羽田空港を出発し、十二月二十一日羽田空港帰着まで約一ヶ月の旅で、団員は新道立美術館準備室長・倉田公祐氏、国学院大学助教授・加藤有次氏、文部省社会教育局・社会教育官、日本博物館協会事務局・住田高市氏と私の五人であった。

訪問地は、アメリカではシアトル、シカゴ、クリーブランド、ボストン、ニューヨーク、ワシントン、ロス・アンゼルス、ハワイの八都市と、カナダのモントリオール及びメキシコのメキシコ・シイター

で総計十都市を訪れたことになる。

今から八年前に私は社会教育施設研修のため文部省より派遣されて渡米しましたが、今回初めての地はシアトル、クリーブランドとメキシコ・シイターの三都市だけで他の都市は二度目の訪問であり、八年の才月の中でアメリカの博物館が各分野に於て如何に変容進歩しているか大変興味を持って訪れたのである。

アメリカに於ける博物館の組織・運営・管理の面ではそれ程大きな変革は見られなかったが、プロフェッショナルな設備・展示と教育普及活動の点では目覚ましい前進がみられ驚異を感じた。

アメリカの博物館を見る場合に我々日本人が最も注意をしなければならないことは、博物館をとりまく思想的環境の相違を理解すること、即ち社会組織の本質を或る程度理解しなければならないことである。

博物館を支えるためには第一に機構・組織が重要な要素

である。

我が国の博物館を設置者別にみると国立・公立(都道府県・市町村立)・私立の三形式に分類されるが、アメリカの博物館も国立・公立(州都市立)・私立の三形式に大別される。しかし行政管理の面では我が国と同時限で比較できない違いがあるのが特徴である。

日本の国立並びに地方自治体が設立している公立博物館は、百パーセントが国又は地方自治体の予算をもって運営されているのが常であるが、アメリカの博物館は国立・公立・私立を問わず総ての博物館はフアンデーション(基金)を持ち、それが財政の基礎となっている。この基金に、地域社会の個人や企業からの寄附金と博物館の事業収益金、そして国・州・郡・市等からの補助金が組み込まれて予算が出来上っているのが実態で、国立や公立博物館の行財政システムを我が国と同様な感覚で見聞すると理解できない点が見出るのである。

アメリカ最大で唯一の国立博物館であるスミソニアン・インストチュエション所属博物館(国立歴史・技術博物館・国立自然博物館・国立美術館その他十館が含まれる)の

実態をみると財政的に百パーセント国から予算が支出され運営されているのではない。国立博物館設立の動機ともなった英国人科学者ジェームス・スミソンの寄附金五十万ドルを基金とし、その利子・配当金・博物館事業収益金と民間個人・企業から毎年継続的に寄附されるものが財政予算に組み込まれているのである。

行政組織をみても名称は国立であるが、最高機関としてボード・オブ・トラステイズ(理事会)が置かれ、理事会の決定によって博物館の一切の運営が行われている。理事会は副大統領、最高裁判所長官、上院議員及び下院議員三名並びに九名の国民代表によって構成され、国民メンバーのうち二名はワシントンD.C.の住民でなければならず、他の七名も同一の州から一人以上選任してはならないこととなっている。

したがって理事会は公私両様の性格を備えており我が国の国立博物館行政組織とは全く異なった様相を呈している。理事会の下にはイグゼクティブ(行政)・フィナンステイブ(財政)・アクワイジション(獲得)・ヴィルディング(建築)の四委員会が置かれているが

財源獲得のためにアクワイジ
ョン・コミッテイが独立した
委員会として置かれているこ
とは、我が国では考えられな
いことである。

州・郡・市立博物館の場合
も同様のシステムがとられ、
公私混交の理事会の下に、行
政・財政・獲得・建築の四委
員会が併置されて地方自治行
政当局から別個に独立し、博
物館機関として独自の運営が
なされている。

一方、私立博物館をみると、
これも前者と同様に最高運営
機構としての理事会又は運営
委員会が組織されている。

理事会のメンバーとしては
博物館理事その他に地方自治
体の理事者や議員等を積極的
に獲得してメンバーに加わっ
てもらい、博物館活動を充分
に認識してもらい地方自治体
からの財政援助をより多く獲
得すべく努力がはらわれている。

このようにアメリカの博物
館界では、国・公立では民間
人からの寄贈を積極的に獲得
し、私立の場合は国や地方自
治体よりの財政援助を積極的
に獲得すると云うことで、財
政運営面で国立・公立・私立
の差異が全く感じられず、各
館は外部からの何等の干渉を
受けることもなく独自の博物
館活動を展開しているのである。

アメリカの博物館の運営面、
財政組織の面で我が国と大き
な違いのある点を話してみた
が、その違いは博物館を支え
る地域住民の博物館と云う機
関の理解度と期待度に大きな
差があるように思えてならな
かった。

我々北海道の博物館人も、
それぞれの地域に密着し地域
住民に期待をされ、よろこん
で楽しく利用してもらえ、博
物館を志向して、博物館人個
々の自己研修を深めるととも
に、ニードに充分対応できる
力を痛感させられた。

設備面、展示技術・教育普
及活動そして学芸職員養成、
研修システムなど多くの面で
教えられるものがあつたが逐
次お知らせしたいものと思っ
ていきます。

(網走市立郷土博物館長)

ポリネシアの雑感

北川 芳 男

一昨年に引き続き、昨年もフ
アヒネ島での発掘調査に参加
した。

フアヒネ島はフレンチ・ポ
リネシアに属するタヒチ島と
ともに南太平洋のソシエテイ
群島の小さな島である。タヒ
チのパピエテから小さな

飛行機で約50分、ヤシの密林
をすぐ背後にもつサンゴ礁上
の飛行場に着く。空港とは名
ばかりで、滑走路が一本とパ
ンダナスの葉で葺いたあずま
屋造りの待合所があるだけで
ある。一昨年、はじめてこの
飛行場に着いたときはいくら
かの戸惑いを覚えたが、二度
目ともなると、故里に帰った
ような気安さである。それは、
この空港の雰囲気ばかりでは
なく、フアヒネ島全体のすば
らしい自然と人情がそうさせ
るのである。

ハワイのビショップ博物館
の篠遠氏から、この島の先史
時代遺跡の地質学的な調査の
協力を依頼されたときは、南
太平洋の名も知らぬフアヒネ
くんたりまで出掛けてゆくこ
は、おつくうに思われてなら
なかつた。それにはいろいろ
の理由があつた。第一には、
北海道の自然に親しみ、北へ
憧れている私にとって、正反
対の熱帯圏の調査である。第
二は熱帯の自然環境に関する
知識と経験に乏しく、果して
役立つだろうかという心配。
そして、そんなことから派生
する、「北の博物館としての使
命をもつ北海道開拓記念館の
最初の海外協力としては、熱
帯」は似つかわしくないので
はないか」という変な意味の

自意識過剰があつたからであ
ろう。しかし、未知なものへの
興味と視野を広くというよ
うなことで、この島に乗り込
んだわけである。最初は一回
きりと思つていたのだが、幸
い二年目も調査費をアメリカ
地理学協会が認めてくれたの
で、存分に南太平洋の自然と
文化を膚で感じとるほどにな
つてしまった。

羽田発二〇時のフランス航
空で約11時間の空の旅は、そ
の大部分は真夜中の洋上を飛
ぶ。そして同じ日の正午近く
にパピエテ空港に着く。日付
変更線を越えるからである。
九月、十月頃のタヒチは日中
でも24〜25°Cの気温で極めて
快適である。ともあれ、再度の
訪問という気安さも手伝つて、
入国管理官に「マイタイ・オ
ラナ(きげんいかか)」と
声をかけると、ちよつとびつ
くりした顔で、「お仕事です
か?どこまでと返ってきた。
「フアヒネで発掘だよ」「ド
クター・シノト知っているか
」「もちろん、彼と一緒に仕
事だ」「そりやーいい、彼に
よろしく」。こんな会話が
わかれた。空港ロビーからタ
クシーを拾う。早速、その運
転手に昨年友達になつたパピ
エテタクシーのアウトイネと
いう運、の消息を聞いてみ

た。「彼は今、空港にいたよ。
もどるかい」。思いがけない
返事が返つてきた。「そうし
てほしい」というと、すぐU
ターンして空港に戻つてくれ
た。一〇〇フラン(約三五〇
円)を渡す。アウトイネは再
会を喜び、ホテルまで私を運
んでくれた。料金は無料。明
日またフアヒネに向う飛行機
に間に合うように送るからと
いう。

タヒチは世界的な観光地であ
る。空港にはジェット機が発着
し、豪華な観光船が港に毎週や
つてくる。そして、原色のゆた
かな明るい街には、自動車やモ
ーターバイクが走り、パリのモ
ードを売る店も多い。そこには
かのゴーガンが画いた野性の魅
力を見い出すことが困難なほ
どである。しかし、底抜けに
明るい人情は、やはりポリネ
シアならではのものがある。
フアヒネは、フアヒネヌイ
(大島)とフアヒネイチ(小
島)の二つの島からなつてい
る。この二つの島には、橋が
かけられ自由に行ききりがで
きる。そして、一つのサンゴ礁
に取り囲まれてるのである。
人口は両島合せて二八〇〇ほ
どで、数カ所に部落が形成さ
れている。そのうち一番大き
いのがフアレである。ここは
島の北端にある空港から約五

軒、沖合いのサンゴ礁のパス（水路）を通って、週二回タヒチやその他の島々から定期船がやってくる島で唯一の港でもある。だから、船の来る日は島中から人々が集り、活動写真小屋（あえて映画館とはいわない。そんな建物なのである）が開かれたり、屋台がでたりするほどの賑わいを呈する。

現在のフレンチポリネシアの主産業は観光産業である。タヒチを中心として、すべての島々は新しい観光開発をめぐらして次々にホテルやその他の施設を整備しつつある。フアヒネとてもその例外ではない。だが、この島では、ココナツやコブラ、さらにはスイカなどの産物があり、船の着く日がその出荷日なのである。そして、幸いなことに、観光ホテルはまだ一軒きりである。この島より遠く、小さなボラ・ボラ島ですら四軒ほどホテルがあるのにくらべると、ポリネシアのなかでも多くの自然が残されていることがわかるであろう。

実はこのホ、パリハイホテルの庭園の一部なのである。サンゴ礁と島との中間には、場合によって、一つの水域、いわば内海（ラグーン）が形成される。そして、このラグーンには、わずかに水面から顔を出したような島状の低地部が形成される。これを現地語でモツ（小島）と呼んでいる。パリハイホテル付近では、このモツが生長して面積を拓け、サンゴ礁と島が陸続きになっているのである。そして、標高はせいぜい一米前後なのである。遺物の包含層はこの沖積地の地下五〜六〇厘のところに位置している。したがって、遺物包含層は、現在の海面とすれすれか、それよりも下にあるということになる。もし、その包含層の位置が昔の生活面であるならば、当然、海面より高くなければならぬ。だとすると、その時より海面が上昇したのか、あるいは、島が沈降したのでなければ、包含層が現在の位置にあるのが説明できないのである。私に課せられた地質学的課題というのは、そのどちらかを判定することであった。ちなみに、この遺跡の年代はAD八五〇年である。地質学的にはまさに現代である。そんな最近の自然現象を説明す

ることくらい至難な業はない。ということ、学問的なことはさておき、発掘調査というものには何時の場合にも楽しいものである。一昨年は、ピシヨップ博物館から六人のスタッフ came が、今回は三人、しかもうち二人は若い女性である。現地の人夫を入れて一〇人あまりのメンバーで、のんびりと時間をかけて発掘を行なう。野ブタも現れる仕末である。

チーフの篠達博士は現地の人々に絶大な信頼がある。彼はフアヒネばかりでなく、ポリネシアのすべての島々において愛され、親しまれている。それは、タヒチの入国管理官との会話の中にもにじみでいたことでもわかると思う。一昨年、フアヒネの帰りに、西サモアに立ち寄った。ユタ大学のジェニングス教授らが、そこで海底遺跡を発掘しているというので聞いてからである。しかし、行ってみると、海底遺跡は掘っておらず、一五世紀の石造遺構の調査を細々とやっていた。彼らは私にはすごく親切だった。けれども、現地の人々からの信頼がまるでなかつた。こんなことが当初の目的である海底遺跡の調査ができなかつた根本的な原因のように思えてならない。海外

にシテ 国内にしろ、野外の調査を成功させるためには、まずもって現地の人々のなかにとび込み、その信頼を得ることが第一の条件になるという鉄則を西サモアで思い知らされたのであるが、篠達氏はそれを完全に行なっているのである。

タヒチのパピエテには古い博物館が一つある。博物館とは名ばかりで、古い建物を利用した収蔵庫のようなものであるが、一応ポリネシアの民俗資料が展示されている。女性館長アウロア・ナツアさんが一人で頑張っている。最初に会ったときは、男だか女だかわからない、男勝りの容貌の持ち主であった。朝九時過ぎから昼近くまで、彼女と話した。

タヒチ政府はいま、新しい博物館をパピエテの郊外に建設中である。しかし、彼女はその準備や計画には参加していない。「どうしてか」と尋ねると、「それは単なる観光用の展示館、しかも、高い給料を出して本国（フランス）から人をよんでやっている。それでは本場のポリネシアの歴史を紹介することはできない、ポリネシアの歴史はわれわれが守り、われわれが作り出すものなのである。私はこ

の博物館に二十七年間も勤めている。だが、政府は、いままで十分な資金も出さず、ただ観光のために、いまになって新しいものに金をつき返もうとしているのだ。しかし、それでポリネシアの歴史が画かれるだろうか、決して画けないであろう。真の歴史を残し、それを普及するために、私はこの博物館を守っていかなければならない。」と熱っぽく語る彼女はまた、「現代の若者はタヒチ語もだんだん話さなくなってきた。これではポリネシアの歴史もあつたものではない」と嘆きながらも「ドクター・シートだけは信頼している。彼は真の意味でのポリネシアの歴史を解明し、それをここに残そうと努めている。彼の仕事を善悪化し、普及するのが私の務めである。」と云いきるのである。

そういう彼女自身のなかにも、生来おおらかで、お人好のポリネシア人の天性は生きている。しかし、彼女で象徴されるように、世界最後の楽園といわれたタヒチにも、十六世紀以後ヨーロッパ人との交渉で失われてきた民族の歴史への目醒めが、静かに、ゆっくりと進行しはじめているのである。

（北海道開拓記念館学芸部長）

日本博物館協会表彰

第三回全国博物館大会は昭和五〇年一〇月二七日、東京都において開催されましたが、席上第一回日本博物館協会の表彰式が行われました。「博物館事業の発展に特に顕著なる功績をあげたる者」として次の四氏が表彰されましたので紹介いたします。(北海道関係)

犬 飼 哲 夫

(北海道開拓記念館)

片 岡 新 助

(阿寒和琴博物館)

武 内 収 太

(五稜郭タワー史蹟館)

米 村 喜男衛

(網走市立郷土博物館)

生涯の博物館

つくりを願ひ見て

片 岡 新 助

比の度北海道博物館協会長より博物館協会ニュース掲載の原稿をとの御依頼を受けましたので過去四十余年の博物館生活をして来たこのことを思い出しながら綴って見ることにいたしました。私は幼少

時代から標本を集める作ることが好きであり言わば蒐集へきに生れて来たと思ひます。小学校時代から斯様な趣味を持つておりましたから植物や魚類の標本を作ったりまた鳥獣の剥製に興味を持ち十七・八歳の時は何とか人様に見て貰えるようになったのでした。私は実業生活を経て釧路に参りましたのは大正六年の暮れでした。その当時は今の釧路の町と違つて淋しい町でした。私ば鳥取町のある富士製紙株式会社に入社(現十條製紙会社)して約十六年居りました。この間いつも心に浮ぶものは釧路に博物館を設立して見たい事でしたので出来得る限りの標本を作り集めようと心掛けたのでした。鳥獣の剥製がこれこれ二〇〇点位は、集まった様に記憶して居ります。斯様にして標本を作ったり集めたりして何とかものになりそうになつて来たので、私としては社会教育の一端でもあり学生児童、一般民衆はもとより旅行者のため市の文化発展になるではなからうかと思へば矢もたてもたまたまずどうしても自分の力でも設立してみたい気になりました。昭和九年退職して私立博物館建設へと足を進めたのでした。其頃は博物館 へて言つても

古道具屋位にしか思われない人多いようでした。私は色々と考えた。市議員であつた知人の高野源蔵氏を訪れて私の考えを話したところ、彼はよいことだから出来る限りの協力はいたそうと言われたので私もほつとしたのでした。高野氏の言われるには釧路は阿寒国立公園の玄関口でもある。まず、趣意書を一冊の帳面に書き、賛助員名簿を作り市の名士を廻つて賛助を求め然る後に考え様となり、私は約二ヶ年に亘つて九十余名の賛助の方々の記名捺印を貰つたのでした。高野氏は当時の市長茅野満明氏、助役の浅村貞輔氏、市議会議員の各氏に話して下さる賛助を得たのでした。この時助役の浅村氏は網走に居られた時、網走の米村喜男衛氏が私と同じ様に網走郷土館を設立しようとして居られそれに対して助力して来たとの話が出たので、私としては是が非でも負けず頑張つて造らねばならないと努力の程を語り合ひ今後のことを御願ひしました。浅村助役も心よく御引き受け下さいましたのでその後は何事も相談に参りました。こうして協力者を得た事は何にかかえがたい力となりまして、こうして運動をして居る

中に博物館となれば建物ばかりではないケースも入用維持費もかかる。私立ではなかなか維持に大変だ、市でも考えるから市の博物館としてやつて行つた方が早道ぢではないかどうだという話が出たので考えて見ればそれもさうだ兎に角出来れば目的が達することだからと決意し、そうしようと言つたところ市に於ても当時の学務課長大西正一氏にも話されたところ同意されました。

私は九十余名の賛助員名簿を市に提出して市議会にかけられるよう提出したところ、取上げられて市議会に提案されましたが、金のかかることであり審議がなかなか通りませんでした。議員の中には博物館を建てたところで陳列品は個人のものであり、いつ引き取られるかわからないとか、博物館はまだ釧路には早いとか、私が考えてやつて居ることはわからない方も多少あつて審議はなかなか通りませんでした。佐熊宏平氏が市長の職にあつた時、私は市長に面会し建物が建てられた時は私は無償で市に寄附いたしますからと約束してあつたので、市議会に於て私の意志を話されましたところ、賛成多数可決したのでしたが、初館の金とては一銭の出道もなかったのですが、私としてはやれやれと重荷をおろした気持ちでした。決定してやつて行こうと決意を新たにして働きました。私は市からは一銭の給料も貰うものでなし自分の有金をつかってやつて行くのでしたから、他から見れば気がぐるぐるしているのではないかと言われる程でした。お前が博物館を造ると言つたつて出来るものかと向つて言つた人もありました。然し糸口を見出した以上曲りなりにも博物館と言ふものを開館してやらねばならぬと努力をおしすすりました。さて館としての建物ですが丁度この当時市庁舎が二階であつたのが三階になり、別棟であつた水道課が三階に移転となるので、この水道課の建物が空家になるので、この空家を図書館と博物館に使用すると言ふことになり階下を図書館、階上を博物館にと決まりまず建物は出来ました。後はケース代その他の費用でこれまた苦勞した。この時道東に師範学校を施設しようとして集めた寄附金があつたので、その中から二千五百円博物館に使つてよいと言ふ事になり、この二千五百円でケースを造らせました。私は陳列品の蒐

集に全力をあげて集め廻りました。厚岸町の向谷正次氏を訪れては太田文助氏の遺品借用、春採の山本多助氏宅からは酋長の遺品として伝えられるものを借用、釧路考古学会の会員の研究品（土器・石器・其の他）かくして陳列品もどうやら揃えましてのでまますと重荷の半分をおろした様な気がいたしました。さて陳列室に設ける元水道課の二階ですが、こは土足で出入して居ったので土を洗い去ろうとして掃除を始めましたが、これまた大変なものでした。この時学務課に勤務されて居った山本武夫氏は毎夜午後五時半頃から八時、九時まで奥様と二人で手伝って下さいました。斯して陳列室が出来るとケースを運び入れ、陳列となりました。この時は考古学研究会の桑原氏、安倍寛次氏、吉田仁磨氏図書主事の佐藤直太郎氏等が御出になって名ばかりの博物館が出来上がったのでした。こうして現在の釧路郷土博物館が産声をあげたのでした。昭和十一年七月十四日。

大東亜戦争の最中は一時閉鎖の声も起りましたが、一たん閉鎖してしまえば再度また復活は面になると思ひ図書館主事の佐藤直太郎氏と相談し休館としたのでした。昭和二十

年七月十四日・五日両日敵機の空襲によつて市の四分の一が火災に見舞われ灰きよと化したのでした。この中に鶴屋デパートも含まれていてこの（鶴屋の中に（映画）キネマがあつたが、このキネマを他に移すために土地の移転先を確保せねばならなかつた折で、なかなか面がらしい様子でした。この時市が話しをつけてやる変り（鶴屋にキネマの面積だけ貸与させてほしいと言ひ、貸与することになり、そこに博物館を開館して見せるということになったのでした。鶴屋も戦争後であるので物資も不足で物資の購入も思うようにならなかつた時でしたから貸与が出来たのでした。博物館としてもあちこちぶつちよくしたが適当な建物はなかつたので、まず間借りでも結構でした。こうしている中に物資の生産も出来て来たので、鶴屋デパートでは博物館を移してほしいと言ひ出して来ました。無論一ヶ年毎の契約で借用したのでしたから、異儀のある筈はありませんでした。丁度この時日本銀行は釧路に建ると言うことになり土地を物しよくした結果三年前建築した市警察署のところが決まり、市警の建物は不用となつたので、それを利用してはと話しが

ありましたので、その様に話しを進め適地を現在の位置に定め、昭和二十六年三月五十嵐組が落札して工事にかかつたのでした。旧市警の材料であつたがほとんど新品を使用したので、出来上つた時はその当時としてはよい博物館に見えました。博物館設立の苦労話は数限りなくありますがこの程度で筆を止めます。これからこの館でどんなことをやって来たかを拾つて書いて見ようと思ひます。博物館事業に微力ながらも役にたつたかと思ふこと釧路市立郷土博物館報の発行、国宝展覧会の開催、博物法制定の際棚橋源太郎先生と共に協力し合い制定が出来たこと、（これは協会長徳川宗敬氏役員、全国の博物館関係にある者、地方選出の代議士の御協力であつたことは言うまでもありません。私は第五区選出代議士伊藤郷一先生に御願ひして国会に働きかけました。棚橋源太郎先生は老齢にもかかわらず国会に足めに御出で下さつたことは本當にありがたかつた。次に棚橋先生が死去後博物館の産みの親とも言ふべき先生なれば先生の御名前を永久に残し伝えたい、且つ又日本の博物館事業に従事する者にとつてと思ひ棚橋賞なるものを協会に

残そうと提唱したところ、協会の関係者会員一同賛同され棚橋賞の出来たことを心ひそかによるこんで居ります。私はこの賞によつて博物館の向上発展に寄与するところがあらと信じて居ります。第五回全国博物館大会を釧路で開催出来ました事も喜びの一つです。こうした色々を書き始めれば永い歳月には沢山あるものです。最後に過去四十余年間に受けた賞を記して先輩先生や現在までの若い方々の御教示御協力に対し紙上をかりて感謝し御礼申したいと思ひます。

昭和二十五年八月二日、網走市に於て全国観覧教育者の会合開催に際し日本博物館協会長徳川宗敬先生より表彰状授与、昭和二十九年十一月十七日、北海道教育委員会より北海道文化奨励賞授与、昭和三十一年十一月十四日、天理市博物館に於て日本博物館の総会開催に於て文部大臣表彰状授与、昭和三十四年十一月三日、釧路市教育委員会より釧路市文化賞授与、昭和四十四年四月二十九日、社会教育功労者として勲六等に叙され単光旭日章を授与、昭和四十四年八月一日、釧路市開催百年記念功労者として表彰状授与、昭和五十年十月二十七日、社団法人日本博物館協会会長より顕彰され賞状授与。

昭和三十年年十一月三日胸像建立。

これは第五区選出代議士伊藤郷一先生が期成会長になられ、役員に市長殿を始め他十名の役員で構成され市在任の諸氏の御賛同御寄附金に依つて出来たもので一方ならぬ御骨折をわずらわした事は何と申し上げてよいやらその言葉を知りません。ただ有難度う御座いましたと感謝し衷心より御礼申し上げる私です。

斯様に生きながらいて参りました過去を振り返つて見ますと夢の様なもので何一つやつて来たが、ただ御蔭様で趣味に生きながらいたことを感謝し机上に目をやり今日まで載いた熱記授与一賞状授与三回、表彰状授与八回、感謝状授与五回が私を励してくれましたことを静かに物語つて居ります。

先輩各先生、始め今日まで御交宜を賜つた諸先生、博物館関係の諸氏に対し厚く御礼申し上げ筆を止めます。

（片岡さんは現在八十歳歳左記にて療養中ですが、特に本誌のために執筆をおねがいしました。原文のまま、静岡市広匠二丁目十二ノ二十一ひかり荘十七号）

受賞に際して

犬 飼 哲 夫

わが国では近年各地に博物館、資料館、郷土館等博物館関係の施設が、相次いで作られ、欧米の文化国にこの方面が引けをとらなくなつて来たことは喜ばしい。太平洋戦争前には博物館乃至はこれに類する物は、極めて貧弱で、国民がむしろこれに関して無関心であつたことは否めない。

そのために日本文化を語る重要な資料が、諸外国に流出した物が多く、嘆かわしい次第であつた。

しかしながら骨董的価値のある物は多少失われても、生活に深い関係を持つ民具は多く残つていたことは幸い、新しく発足した博物館類似施設の今後のあり方に、期待されるところが大きい。

不肖は昭和五年以来、北海道大学附属博物館の責任者として、昭和三十六年までその任に当り、現在北海道開拓記念館で更に同じ方面で活動出来る機会に恵まれたこと感謝に堪えないが、責任の重大なことを自覚せざるを得ない。このたび日本博物館協会から受賞されて、過去の不業績を

省みて、いささか慚愧とするところであるが、これを激励の鞭と考え、その道に精進する決意である。

博物館施設引いては博物館の認識のおくれから、わが国では大衆はもとより、有識者の多くも、博物館が観光を目的としたものである如き思潮に捕われていることは否めない。博物館はもちろん観光にも大きな役割を持つているが、それだけが使命ではない。蒐集されてはいる物は、これから後にとだけ多くの人が、またどれだけ多くの者が有効に利用するか測り知れない。集蔵物は言葉以上にまた文字以上に多くの時代を反映した物語りを秘めているのである、よつて蒐集物を整理し、保存につとめることも大事な業務であると信ずる。とこの博物館も大切な教育施設で、各学校ではいろいろな点で整えることが不可能な施設や資料を持つているから、学校と協力してもつと教育に利用すべきである。

(北海道開拓記念館長)

◆学芸職員研修会開催

主催 道博協・開拓記念館
日時 昭和五十一年一月二三
日、二四日
場所 才一日記念館、才二日 日赤れんが
研修日程 才一日 「道南の民俗」講師、渋谷道夫
開会式、オリエンテーション、全体会議、「学芸職員の研究体制について」
司会 網走市立郷土博物館 長 米村哲英、提言者 新道立美字首員武田厚、懇親会、
才二日 研究発表、道東の埋蔵文化財、発表者 釧路郷土博物館々長補佐 沢四郎
全体会議、「学芸職員部会の組織化について」

全体会議で討論されたこと

討論は学芸員の研究体制についてであつたが、道美の武田氏から、学芸員の組織化について提言があつた。その必要性はみとめ、最終的には、学芸職員の組織として、一団体をつくることで散会した。翌二日の全体会議ではその組織の目的と会の所属を中心に討議をした。その結果、会の目的は、我々が最も研修を深めなければならない「博物館

学の研修を深め、北海道博物館の振興を一層推進する」ととし、この会はできれば北海道博物館協会の一部として参加させてもらいたいということになつた。会の組織内容等については、本年六月三、四日に開催予定の斜里大会までに具体策をまとめて、大会で審議してもらうこととし、

会の世話人として道美の武田氏をえらび、札幌周辺の学芸職員で草案作成となつた。いづれにしてもこの部会は学芸職員の自主的部会として運営され、道博協は連絡を助ける程度で、運営には関与しないという条件つきです(網走の米村哲英館長から寄せられた報告を事務局で集約したものです)

◆小規模博物館等研修会開催

主催 北海道博物館協会
日時 昭和五十一年一月五日、
六日、七日、
場所 北海道立教育研修所
(江別市)

参加者 一八名
開会式後、講演「地域の社会教育における郷土館、博物館の占める役割」講師、道研社会教育研究部長、谷川伸氏。道博協として、道立研修所を使つての研修会は切、行われたもので、

今後このような研修会はぜひつづけてもらいたいと好評であつた。

新会員の紹介

〔団体会員〕

小樽水族館公社
(小樽市祝津三丁目三〇三)

〔個人会員〕

大下 康 男

〔賛助会員〕

中野 真 輔
(函館市・五稜郭タワー社長)

〔退会〕

小樽市水族館
(四九年七月一四付小樽水族館公社移管)